



パテック フィリップ ジュネーブ

2021年6月

パテック フィリップ、パテック フィリップ・ジュネーブ・サロンにおいて、これまでに発表された中で最も包括的な希少なハンドクラフトの傑作のコレクションを展示

ジュネーブのマニファクチュール パテック フィリップは、2021年6月16日から26日まで、ロース通りの歴史的本社において75点を超える懐中時計、腕時計、ドーム・テーブルクロック、テーブルクロックからなる希少なハンドクラフトの最新の傑作を展示する。これらは、手彫金、クロワゾネ本七宝、七宝細密画、ギョシェ装飾、ジュム・セッティング、細密な木象嵌など、高度なクラフトマンシップへのオマージュともいえる、ユニークピースとリミテッド・エディションのコレクションである。この機会に、パテック フィリップの現行コレクション中、とりわけ精緻な装飾が施された6点の新しいタイムピースも発表される。

機械式時計製作の初期の時代から、職人たちは時計の装飾に常に細心の配慮を注いできた。時計は、信頼できる精密機器へと進化していく前は、美しく、芸術的に仕上げられた宝物であった。ジュネーブでは、時計製作に関連するすべての職能を集めた組織である著名な《ファブリック》が、個々の装飾技術の発展に肥沃な土壌を提供した。1839年以来、ジュネーブの偉大な伝統の継承者として、パテック フィリップは、常に最も才能ある芸術家たちを起用して自社の創作品を装飾することに努めてきた。1970年から1980年の時期には、装飾を施した時計の需要が落ち込み、いくつかの先祖伝来の技術が消滅の危機に瀕していた。しかしマニファクチュール パテック フィリップは、七宝細密画を中心とする、これらすべての希少なノウハウを保存し、新しい命を吹き込むために全力を傾けてきたのである。

大いなる情熱

今日に至るまで、パテック フィリップはこれらすべての職能を保護し、継承することに注力してきたが、それにとどまらず、新しい地平を目指すアーティストとの緊密な協力により、これらをさらに進化させることにも取り組んでいる。またマニファクチュール パテック フィリップは、時計を装飾するためのまったく新しい技術の開発もサポートしている。そのひとつが、細密な木象嵌技術である。2020年の春にプラン・レ・ワット（ジュネーブ）に落成した驚異的な新工場の建物には、工芸技術のための十分なスペースが確保されていることから、パテック フィリップにとって伝統的なクラフトマンシップがいかに重要であるかを見取ることができる。

豊かな2020～2021年コレクション

毎年、これらの洗練された工芸技術の際立った美しさと輝きにハイライトを当てるため、パテック フィリップは最高のクラフトマンシップを体現したユニークピースとリミテッド・エディションのコレクションを発表している。とりわけ豊かな2020年コレクションは、自然、美術、5大陸の文化的伝統など、多彩なテーマからインスピレーションを得たモチーフを持つ70点以上の懐中時計（マッチするするスタンド付）、腕時計（カトラバ、ゴールデン・エリプス、婦人用ミニット・リピーター、婦人用ノーチラス）、およびドーム・テーブルクロックを含んでいる。昨年は惜しくも展示されなかったが、パテック フィリップは細心の配慮を注いでこれらを



《報道資料》 ページ 2

維持し、一般や愛好家への公開に備えた。ジュネーブのパテック フィリップ・サロンにおける今回の展示は、とりわけジュネーブの伝統へのオマージュであるといえる2021年の創作コレクションも含んでいる。世界中のプライベート・コレクターの元に出荷される前に、すべての作品を一堂に見学できるユニークな機会を提供する。展示を見学中に、職人たちによる高度な技術の実演を見ることもできる。

多彩な芸術的工芸技術

手彫金は、時計製作において最も古い歴史を持つ装飾芸術である。これはジュネーブの偉大な伝統技術のひとつとされている（18世紀後半には、200人以上の彫金家がジュネーブで活動していた）。パテック フィリップの《希少なハンドクラフト2020-2021》コレクション中においても重要な位置を占めている。手彫金は懐中時計のケース裏面を装飾したり、他の技法で描かれたモチーフの縁取りとして用いられる。さらに素材と対照的な色のゴールドの糸をインレイとしてはめ込む、ダマスカス象嵌においても用いられる。

クロワゾネ七宝も、昔から時計製作の要素のひとつであった。多くのユニークピースやリミテッド・エディションの創作品は、比類のない鮮やかさと永久に変らぬ色合いが見る人を魅了する。その好例はドーム・テーブルクロック《ジャズ》である。驚異的な全長18.3 mの平らなゴールド・ワイヤーが装飾の基本となっている。ワイヤーは手作業で小さなセクションにカットされ、モチーフの輪郭にしたがって曲げられる。次いで48色の透明な釉薬が施される。クロワゾネ本七宝は多くの場合、金粉または金箔や銀箔の微細な小片（パイオン）を混ぜることにより効果を強めている（パイオネ七宝）。

七宝細密画は、ジュネーブのパテック フィリップ・ミュージアムに展示されている多数の歴史的な作品によって明らかのように、17世紀以来、ジュネーブの最も重要な伝統技術のひとつであった。本展示会においてもその存在感は際立っている。主に懐中時計のケース裏面と腕時計の文字盤に見ることができる。七宝細密画家は微細な筆を用い、一筆一筆、モチーフを描いていく。

パテック フィリップはすべてのクラフトマンシップのユニークな伝統に門戸を開き、ドーム・テーブルクロックにおいてフランスを起源とするリモージュ七宝（数種類の透明な釉薬を重ねる）、フォーレ七宝（立体感のある七宝）、ファイヤンス焼のロンウィー七宝（黒い縁入り）という3つの輝かしい技術を紹介している。

ギヨシェ装飾は、伝統的な手動の機械を使用し、繊細な幾何学模様を金属の素材に彫刻する。伝統的なフランケ七宝の技法は、透明な七宝の層を通し、下地に施されたギヨシェ装飾が光を受けて燦めく。クロワゾネ七宝の特定のモチーフにおいては、頻繁にギヨシェ装飾が共に用いられる。

細密な木象嵌はきわめて精巧な技巧であり、パテック フィリップは、数年前から腕時計の文字盤と懐中時計のケース裏面を装飾するためにこれを採用してきた。さまざまな色や木目の多種類の木から切り出された数百もの微小な木片とインレイを組み合わせてつくられる小さな画像は、巧みさの新しい頂点を示すものである。

ダイヤモンド・ジュエル・セッティングは、腕時計のベゼルに輝きをもたらし、ハイジュエリー・ウォッチの全面に息をのむような燦めく装飾を与える。



パテック フィリップはまた、さまざまな分野のクラフトマンシップを組み合わせ、いわゆる混合技法を数多く使用することにより、その創造性と工芸技術の高さを立証している。懐中時計《パンダ》は、その最も印象的な例のひとつである。このユニークピースは、裏面にはパンダが細密な木象嵌により描かれ、文字盤はフランケ本七宝により装飾され、ケースとベゼルには手彫金が施されている。

現行コレクションにおける希少なハンドクラフト

希少なハンドクラフト技術は、ユニークピースやリミテッド・エディションだけにとどまらない。パテック フィリップは、限定されたグランド・コンプリケーションや象徴的デザインの時計など、現行コレクションの一部のタイムピースの装飾にこれを採用している。《希少なハンドクラフト 2020～2021》展示会を機に、マニュファクチュール パテック フィリップは、才能溢れるアーティストによってユニークで魅惑的な新しい息吹を与えられた、著名なコレクションのニューバージョン6点を発表する。12の複雑機能を備えたダブルフェース腕時計 スカイムーン・トゥールビヨン、手彫金を施したローズゴールド・ケースにブラウンのシャンルヴェ本七宝とギヨシェ装飾を組み合わせている（6002R-001モデル）。ミニット・リピーターとレトログランド日付表示針付永久カレンダーを備えた自動巻グランド・コンプリケーション5304モデルのニューバージョンは、80個のバゲットカット・ダイヤモンドで装飾されたローズゴールド仕様である（5304/301R-001モデル）。ミニット・リピーターと永久カレンダーを備えたグランド・コンプリケーション5374モデルは、本青七宝文字盤を備えた新しいホワイトゴールド・バージョンとなった（5374G-001モデル）。またフランケ本七宝の文字盤と、ダイヤモンドを《フラム》セッティングしたベゼルを備えた新しい婦人用ミニット・リピーター（7040/250G-001モデル）、および手彫金とシャンルヴェ七宝を施した希少なハンドクラフトによるホワイトゴールド仕様のゴールデン・エリプス（5738/51Gモデル）がパテック フィリップの現行コレクションに加わった。さらにダイヤモンドをスノー・セッティング（別名ランダム・セッティング）した、ホワイトゴールド仕様のノーチラス・ハイジュエリーのニューバージョンにおいて、マニュファクチュール パテック フィリップはマスター・ジュエラーの至高の技巧をいま一度立証している（7118/1450Gモデル）。

